

2014/8/2

The 12th Clinical Occupational Therapy Summer Seminar 2014

パラレルな場の落とし穴

パラレルな場の効果的な利用法

Hiroshi Yamane ; OTR, PhD
Human Health Science
Graduate School of Medicine, Kyoto University



ひとは ひとのなかに生まれ

ひとのなかでそだち

ひとは ひとのかかわりに傷つき

ひとのかかわりで癒される

作業療法の詩「より



集団の利用

Pratt J.H. (1905)	結核患者学級集団指導
Lazel E.W. (1921)	統合失調症集団精神療法
Moreno J.L. (1925)	サイコドラマ
Rogers, Carl (1967)	エンカウンター・グループ



第二次大戦中の戦争神経症に対する治療をきっかけに、集団精神療法は米国を中心に普及
1980年代には、「集団療法」の理論や技法の基本的体系がほぼ確立



通常のコル団療法の定義

集団療法とは、目的をもって構成された集まり、提供された場で、参加者個々の目的にそっておこなわれる集団と場の力を利用したはたらきかけである。その働きかけの集団と場は、参加者間の関係、集団と参加者の関係、集団がおこなわれている場もしくは集団がもたらした場の環境や状況と影響を理解し、必要な調整が可能な者（治療的責任を負った専門職）によって維持されるものである。



通常の集団療法の落とし穴

- 系統的な構造化 — 一般化の困難さと侵襲の危険
- 治療構造へのとらわれ — セッション外の影響
- 治療者との同一化 — 閉塞的な安定
- 非治療的な凝集性 — 集団防衛
- 忘れられる個々の目的 — 集団への捕らわれ



パラレルな場の誕生

従来の集団作業療法、集団療法の限界
 集団療法の適応が困難でも人が居る場が必要
 暮らしの中のひとの集まりを治療に活かしたい
 凝集性を高めず成熟した場を求めて



パラレルな場(トポス)

場を共有しながら、人と同じことをしなくてもよい。集団としての課題や制約を受けず、自分の状態や目的に応じた利用ができ、いつだれが訪れても、断続的な参加であっても、わけへだてなく受け容れられる場

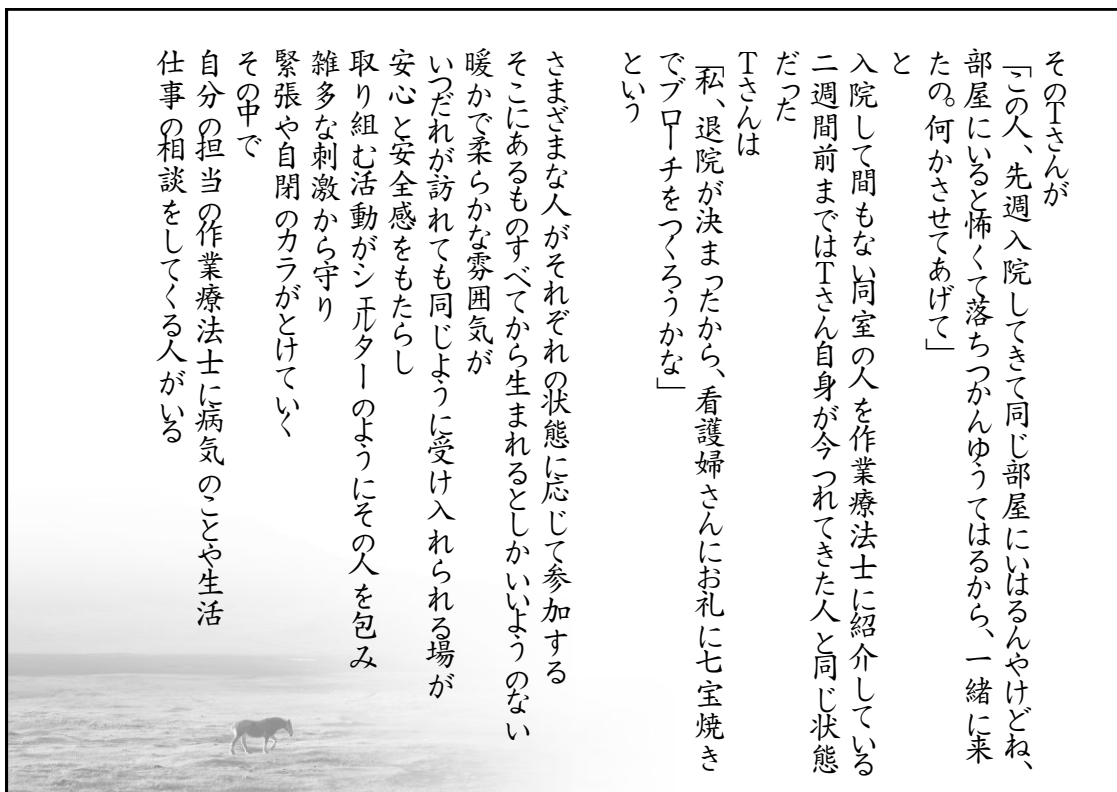


ある文化が成熟し、そこにある状況や現象を生み、その場を利用する者に、なんらかの心理的な作用をもつ開かれた空間



絵を描いている人
革細工をしている人
それを見ている人
見ている間に自分もしてみたくなったのだろうか
「革細工したいんですが、教えてください」という人
向こうのテーブルでは、相手がみつかったようでゲームが始まり、少し離れた部屋ではだれかがピアノを弾いている
それぞれ、思い思いに自分の活動に取り組んで過ごしている
照れくさそうに入ってきたMさんが
「この前、してた続きがしたい」という
調子を崩して参加がとぎれ、三か月ぶりの来室である
「私、覚えてますか？ちよつと疲れて、入院したの」と話しかけてきたのはHさん
4年ぶりに顔を見る
二週間あまり前
看護婦さんにつれられて始めて参加したTさんは
自傷企図があり観察室で過ごしているが
何もすることがないと落ちつかないということで
このパラレルな場の時間だけ作業療法室で活動することが許可された
絵を描いたり
他の人がしているのを見て興味を抱いたビーズ手芸などをして過ごしていた





そのTさんが

「この人、先週入院してきて同じ部屋にはるんやけどね、部屋にいと怖くて落ちつかんゆうてはるから、一緒に来たの。何かさせてあげて」

と

入院して間もない同室の人を作業療法士に紹介している二週間前まではTさん自身が今つれてきた人と同じ状態だった

Tさんは

「私、退院が決まったから、看護婦さんにお礼に七宝焼きでブローチをつくらうかな」という

さまざまな人がそれぞれの状態に忘れて参加する

そこにあるものすべてから生まれるとしかいいようのない

暖かで柔らかな雰囲気

いつだれが訪れても同じように受け入れられる場が

安心と安全感をもたらし

取り組む活動がシニターのようにその人を包み

雑多な刺激から守り

緊張や自閉のカラがとけていく

その中で

自分の担当の作業療法士に病気のことや生活

仕事の相談をしてくる人がいる

パラレルな場の構造

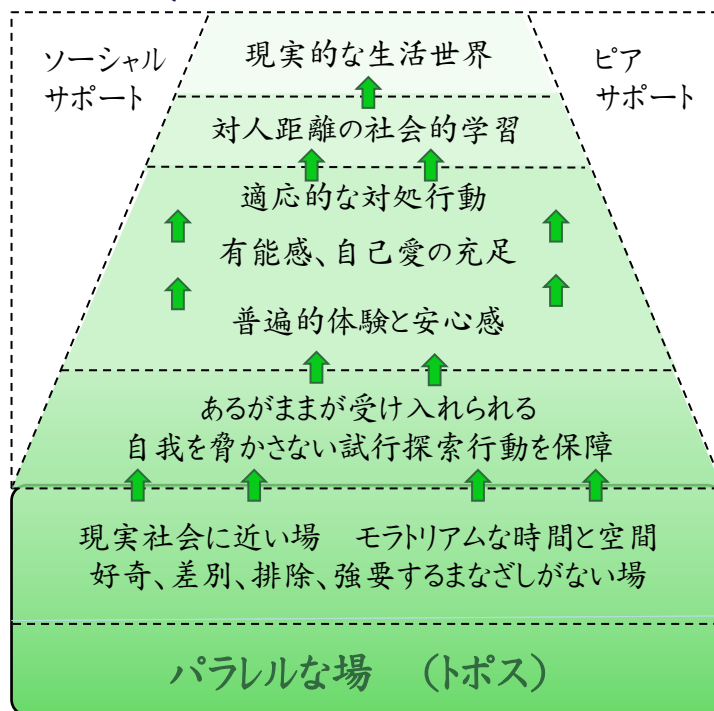
- 参加方法：見学参加やオープンに、開始は処方もしくは利用契約による自由な利用の保障
- 利用時間：休日を除き可能なかぎり毎日、同じ時間帯による利用の保障
- 実施場所：同じ場による利用の保障
- 利用規則：社会規範にそった最低限の規則による利用の保障
- 活動種目：実際に作品や材料道具などは自由に見て触れるように、多くの種目を用意
- 利用目的：利用者個々に設定
- スタッフ：担当制を採用し利用者4～5名に1名
場が安定し患者層に広がりがあると10名に1名くらいでも可能
- 参加人数：常時の参加者が4～5名以上になると場として成りたち始める
相互の関わりがよい形でみられるようになるのは、10～15名
場全体としては20～30名程度までが適正

パラレルな場の効用

普遍的体験をともなう安心と安全感の保障
 他者との距離の取り方を学ぶ社会的学習体験の機会
 モラトリアムな時間と場における探索行動の保障
 適応的な対処行動を保障
 自我を脅かされず有能感や自己愛を満たす機会
 受容体験のなかで自分を確かめる試行の機会
 ソーシャル・ホールディングの機能
 ピア・サポートを育てる



パラレルな場の機能



パラレルな場の適用

- ① 精神科早期リハビリテーションへの導入
- ② ひとの中で安心して過ごせる場の提供
- ③ 思春期心性をもつ対象に対する有能感や自己愛の充足
- ④ 精神分析的療法などと相補し自己愛を充足
- ⑤ 寛解期初期の試行探索の場の提供
- ⑥ 個人的な趣味や生活技能の習得



力動的集団プログラム
 教育的集団プログラム
 課題集団プログラム
 長期療養者の生活プログラム
 ピア・サポート育成の場

パラレルな場の課題

- ① どのように導入し、開始すればよいかこまる
- ② 次のステップにいつどのように進めるか
- ③ スタッフによるかわりの偏りやダブルセラピスト
- ④ 担当スタッフの役割と常時の関わり方をどうするか
- ⑤ 参加者、治療・援助者ともども作業活動に依存しやすい
- ⑥ 1人あたりの受け持ち人数と場全体の適正人数はどのような